

生涯スポーツ演習Ⅱにおける学生による 授業評価について（2）

山口 良博・岩本 哲也・下谷内勝利
末次 美樹・鈴木 淳平・柳 浩二郎

I. はじめに

今日、我々が暮らす社会は、経済や技術などの発展により、生活が豊かで便利になった。これに伴い、我々の身体運動は減少し、オーバーワークより、むしろ運動不足の方が問題視されるようになった。『大学生の健康・スポーツ科学』¹⁾の「体力の発達にみられるひずみ現象」によると、発達曲線予想線が17歳から20歳（高校生から大学生にかけて）までに極端に落ち込んでいる。週5日制と受験勉強によって身体運動の機会が激減していることがこの原因であろうと述べられている。この年代は発育発達の完成期であり、この時期に体力発達の落ち込みが認められるのは人間形成にとって重大な問題であるとしている。社会全体における運動不足問題とこの時期における身体運動の重要性を改めて考える必要がある。また、ネット依存症などにみられるように、人とのコミュニケーションを図ることができない若者が増加していることも社会問題となっている。これらを踏まえると、生涯にわたり、健康な生活を送るために運動の果たす役割は大きく、特に大学における体育実技の果たす役割は重要なものであると思われる。なぜなら、体力面の維持・向上はもとより、生涯スポーツの礎となる技術面の獲得・向上だけでなくとどまらず、コミュニケーション能力やチームワーク・協調性の向上などをも期待できるからである。それ故に、本学における生涯スポーツ演習Ⅱ（スキー・スノーボード）は、学外にて宿泊を伴う集中授業形式で行われ、また、技能レベルに応じて、学部学科・学年・性別などに関係なく班編成されて行われることなどにより、それらに対してよ

り大きな授業成果が得られると考えられる。

平成3年に大学設置基準が改正され、大学の自己点検・評価が努力義務化されたことにより、大学における教育活動を自ら点検・評価する動きは盛んになった。これに伴い、体育実技に関しても、これまで学生による授業評価が多く行われており²⁾³⁾⁴⁾、特殊な授業形態といえるスキー・スノーボード実習に関しても、多くの研究が行われるようになってきている⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾。

そこで本研究は、生涯スポーツ演習Ⅱで実施している「学生による授業アンケート」を前回と同じ方法⁹⁾で行い、内容を比較検討することで、今後の授業における質的向上を図る資料を得ることを目的とした。今回は、スキー・スノーボードの種目別、必要に応じてレベル別による比較を付け加えた。これにより、今後の授業内容の資質向上に寄与する更なる資料を得ることが期待できよう。

Ⅱ. 方法

1. 対象

調査対象は、平成25年1月30日～2月3日に、上越国際スキー場にて開講された生涯スポーツ演習Ⅱに参加した48名（スキー21名、スノーボード27名）とした。ただし、スキー班1名が事情により早退したため、アンケートの提出は47名となった。このうち、本講義の2度目の受講生（本講義には基礎と応用があり、2度受講することが可能）は、11名であった（スキー7名、スノーボード4名）。

表1に受講生の学年・学科別人数、表2に事前授業時の自己申告による技能レベルを示した。

2. 授業の概要

(1) 本実習の目的

スキー・スノーボード技術と理論を理解することによって、生涯を通じて楽しく安全にスキー・スノーボードを行うことのできる能力と態度を育てる。ま

表1 受講生の学年・学科別人数

学年	学科	人数	
4	歴史	2	
	経済	1	
3	仏教	4	
	禅	3	
	商	1	
	法律B	2	
2	仏教	2	
	禅	3	
	国文	1	
	社会	1	
	心理	2	
	経済	2	
	法律	3	
	法律B	1	
	経営	3	
	1	国文	5
		歴史	1
地理		1	
経済		2	
商		3	
現応経		1	
政治		1	
経営		2	
市戦		1	

表2 受講生の技能レベル

スキー	初心者	2 (0)
	初級 (ボーゲン)	2 (1)
	中級 (パラレル)	15 (2)
	上級 (ウェールデン)	2 (1)
	計	21 (4)
スノーボード	初心者	12 (7)
	初級 (木の葉落とし)	5 (2)
	中級 (ロングターン)	9 (2)
	上級 (種々のターン)	1 (0)
	計	27 (11)

(女子内数)

た、冬山での生活を通して自然への理解と認識を深め、集団生活によって大学時代でしか得られない人間関係を形成する。

(2) 実習中の留意点

講習・授業でのルール、雪山でのルール、集団生活でのルール、ホテルでのルールを守り、身勝手な行動は慎む。特に、雪山では天候が急激に悪化する場合もあり、状況判断ミスが生命を脅かす事態に直結することもある。規律を守り、教員と学生、学生相互の信頼関係を大切に、安全を第一に楽しく実りある5日間になるよう努めてもらいたい。

(3) 実技・講義講習について

スキー・スノーボード実習は、1回の事前授業と現地での4泊5日による実技講習と講義によって行われた。実技講習においては、事前に自己申告した技能レベルと初日に行った技術テストによって、スキー4班、スノーボード5班に分け、それぞれ1名の担当教員によって講習が行われた。各班の人数は、安全と学習効果を考慮し5名前後とした。

講習は、班別の実技講習（午前・午後それぞれ3時間）と夕食後の講義（全体での講義、班別での講習、2時間）の2つに分け、実技講習ではビデオ撮影等も行い、講義での材料とし、学生の技術向上に役立てた。受講生は、実習記録に実習と講義の内容を記入し、担当教員に提出するようになっている。

(4) 各日程のスケジュール

< 1日目 >

7:30 大学会館前集合

8:00 大学出発 上越国際スキー場に到着後レンタル用具合わせ・実習準備

12:00～13:00 昼食・休憩

13:00 開講式

13:30～16:30 実習班を分けた後実習開始

18:00～19:00 夕食

19:00～21:00 講義

22:00 消灯

< 2～4日目 >

7:00～8:30 朝食

9:00～12:00 実習

12:00～13:30 昼食・休憩

13:30～16:30 実習

18:00～19:00 夕食

19:00～21:00 講義

22:00 消灯

< 5 日目 >

7:00～8:30 朝食

9:00～11:00 実習

11:00～12:00 閉講式

12:00～12:45 昼食・準備

13:30 バス出発

17:00 大学到着後解散

3. アンケート項目

質問項目は、「授業の目標・学習効果関連」15項目、「授業の方法について」15項目、「施設等について」5項目、「総合評価」1項目の全36項目とした。

質問項目への回答は、「全くそう思う」、「そう思う」、「どちらとも言えない」、「そう思わない」、「全くそう思わない」の5件法として、それぞれに5点、4点、3点、2点、1点を与えて得点化した。ただし、「総合評価」についての回答は、「非常に良かった」、「まあまあ良かった」、「普通」、「少し悪かった」、「悪かった」の5件法とした。

調査方法は、自記式配布回収法とし、授業最終日に行った。

Ⅲ. 結果と考察

1. 授業の目標・学習効果関連

表3及び表4は、「授業の目標・学習効果関連」に関する結果である。全体15項目での平均値は、前回の4.56という高い値からは少し低めの値ではあるが、4.45という高い値を示した。

前回高い値を示した項目と今回の数値とを比較してみると、「生涯を通じてスキー・スノーボードを楽しむための基礎が身についた」では、前回は4.80だったものが、今回は4.72と低くなっている。「新しい友達ができただけ」では4.78から4.51に、このほかに「新たな発見が多くあった」(4.78→4.55)、「技能が上達した」(4.76→4.64)、「運動量は十分であった」(4.73→4.70)と若干

表3 授業の目標・学習効果関連の結果

項目	平均値	標準偏差	V5	V4	V3	V2	V1	前回値	誤差
1. 運動量は十分であった	4.70	0.46	70.2	29.8	0.0	0.0	0.0	4.73	-0.03
2. 技能が上達した	4.64	0.57	68.1	27.7	4.3	0.0	0.0	4.76	-0.12
3. (種目についての) 基本的技術が身についた	4.62	0.53	63.8	34.0	2.1	0.0	0.0	4.71	-0.09
4. (種目についての) 応用技術が身についた	4.02	0.82	25.5	59.6	6.4	8.5	0.0	4.12	-0.10
5. (種目についての) 科学的知識が深まった	3.96	0.86	25.5	51.1	19.1	2.1	2.1	3.95	+0.01
6. 自然と触れ合い、自然についての理解が深まった	4.40	0.71	53.2	34.0	12.8	0.0	0.0	4.44	-0.04
7. 危険性の認識と克服法が習得できた	4.47	0.62	53.2	40.4	6.4	0.0	0.0	4.56	-0.09
8. ゲレンデでのエチケットを学ぶことができた	4.51	0.62	57.4	36.2	6.4	0.0	0.0	4.71	-0.20
9. 新しい友達ができ	4.51	0.88	68.1	21.3	6.4	2.1	2.1	4.78	-0.27
10. 健康や体力が向上した	4.19	0.85	44.7	31.9	21.3	2.1	0.0	4.49	-0.30
11. 生涯を通じてスキー・スノーボードを楽しむための基礎が身についた	4.72	0.45	72.3	27.7	0.0	0.0	0.0	4.80	-0.08
12. 理論と実践を関連づけて学習できた	4.49	0.62	55.3	38.3	6.4	0.0	0.0	4.49	±0.00
13. 身体や健康への関心が高まった	4.26	0.87	44.7	42.6	8.5	2.1	2.1	4.37	-0.11
14. 新たな発見が多くあった	4.55	0.65	63.8	27.7	8.5	0.0	0.0	4.78	-0.23
15. この授業を他の学生にも勧めたい	4.74	0.57	80.9	12.8	6.4	0.0	0.0	4.73	+0.01

V5:「全くそう思う」と回答した割合(%) V4:「そう思う」と回答した割合(%) V3:「どちらとも言えない」と回答した割合

V2:「そう思わない」と回答した割合(%) V1:「全くそう思わない」と回答した割合(%)

低くなっている。「この授業を他の学生にも勧めたい」では、4.73 から 4.74 と少し高くなった。

前回改善を要すると考えられた項目では、「(種目についての) 科学的知識が深まった」(3.95 → 3.96) の項目で 0.01 向上したものの、「(種目についての) 応用技術が身についた」(4.12 → 4.02)、「身体や健康への関心が高まった」(4.37 → 4.26) という結果となっている。

なかでも「応用技術が身についた」の項目について、表4のようにスキーとスノーボードに分類して分析を試みると、スキーが 4.20 の値であるのに対して、スノーボードが 3.89 と低い値であることがわかる。この要因としては、特に初級者・初心者においてスノーボードの基本的技術が教員の考えるレベルに到達していない段階で、応用・発展過程の技術獲得を希望していることが考えられる。それは、スノーボード班をレベル別に上級者・中級者のグループと初級者・初心者のグループとに大別してみると、上・中級者のグループで

表4 授業の目標・学習効果関連の結果 (種目別)

項 目	全体	スキー	ボード
1. 運動量は十分であった	4.70	4.75	4.67
2. 技能が上達した	4.64	4.20	4.59
3. (種目についての) 基本的技術が身についた	4.62	4.60	4.63
4. (種目についての) 応用技術が身についた	4.02	4.20	3.89
5. (種目についての) 科学的知識が深まった	3.96	3.85	4.04
6. 自然と触れ合い、自然についての理解が深まった	4.40	4.30	4.48
7. 危険性の認識と克服法が習得できた	4.47	4.40	4.52
8. グレンデでのエチケットを学ぶことができた	4.51	4.50	4.52
9. 新しい友達ができた	4.51	4.55	4.48
10. 健康や体力が向上した	4.19	4.25	4.15
11. 生涯を通じてスキー・スノーボードを楽しむための基礎が身についた	4.72	4.70	4.74
12. 理論と実践を関連づけて学習できた	4.49	4.45	4.52
13. 身体や健康への関心が高まった	4.26	4.45	4.11
14. 新たな発見が多くあった	4.55	4.55	4.56
15. この授業を他の学生にも勧めたい	4.74	4.75	4.74

3.94、初級・初心者のグループで3.56という数値となっていることで理解できよう。さらに、グラウンド・トリックやキッカー、ハーフパイプなど多様な楽しみ方があるスノーボードにおいて、上・中級者がそのような発展的技術の獲得まで期待していることが授業を通して感じられる。そのため、その段階の技術まで予定していない授業内容とのギャップが影響していると考えられる。

また、「科学的知識」あるいは「身体や健康への関心」については、前回同様実技講習よりも事前授業や講義での内容に関係する項目のため、今後も引き続き課題として改善を図っていかなければならない。

2. 授業の方法について

表5及び表6は、「授業の方法について」に関する結果を示したものである。全体15項目での平均値は、こちらも昨年の4.62から4.48と若干低くなっている。

昨年の内容と比較してみると、「指導教員は十分に熱意を持って指導を行っ

表5 授業の方法についての結果

項目	平均値	標準偏差	V5	V4	V3	V2	V1	前回値	誤差
1. オリエンテーションの方法は良かった	4.30	0.75	46.8	36.2	17.0	0.0	0.0	4.46	-0.16
2. 事前授業の方法・内容は良かった	4.15	0.78	36.2	44.7	17.0	2.1	0.0	4.34	-0.19
3. (種目内での) 班分けの方法は良かった	4.45	0.72	55.3	36.2	6.4	2.1	0.0	4.46	-0.01
4. 練習形態は良かった	4.62	0.61	68.1	25.5	6.4	0.0	0.0	4.66	-0.04
5. 練習の進行状況は適切であった	4.57	0.68	68.1	21.3	10.6	0.0	0.0	4.61	-0.04
6. コミュニケーションは良かった(対教員)	4.72	0.45	72.3	27.7	0.0	0.0	0.0	4.76	-0.04
7. コミュニケーションは良かった(対学生)	4.53	0.62	59.6	34.0	6.4	0.0	0.0	4.76	-0.23
8. 授業は創造性に富む内容だった	4.32	0.73	46.8	38.3	14.9	0.0	0.0	4.76	-0.44
9. この授業から啓発されることが多かった	4.32	0.73	46.8	38.3	14.9	0.0	0.0	4.46	-0.14
10. この授業は自分が期待していた通りであった	4.34	0.65	51.1	38.3	8.5	0.0	0.0	4.59	-0.25
11. 指導教員は授業をよく工夫していた	4.64	0.57	68.1	27.7	4.3	0.0	0.0	4.71	-0.07
12. 指導教員は十分に熱意を持って指導を行っていた	4.72	0.50	74.5	23.4	2.1	0.0	0.0	4.88	-0.16
13. 実習の時間配分は適切だった	4.51	0.69	61.7	27.7	10.6	0.0	0.0	4.61	-0.10
14. 理解を深めるための補助手段(VTR・プリント)は適切だった	4.28	0.83	48.9	31.9	17.0	2.1	0.0	4.39	-0.11
15. 教員の話し方は、良かった	4.70	0.51	72.3	25.5	2.1	0.0	0.0	4.88	-0.18

V5:「全くそう思う」と回答した割合(%) V4:「そう思う」と回答した割合(%) V3:「どちらとも言えない」と回答した割合

V2:「そう思わない」と回答した割合(%) V1:「全くそう思わない」と回答した割合(%)

ていた」(4.88 → 4.72)、「教員の話し方は良かった」(4.88 → 4.70)、「コミュニケーションは良かった(対教員)」(4.76 → 4.72)、「コミュニケーションは良かった(対学生)」(4.76 → 4.53)、「授業は創造性に富む内容だった」(4.76 → 4.32)「事前授業の方法・内容は良かった」(4.34 → 4.15)、「理解を深めるための補助手段(VTR・プリント)は適切だった」(4.39 → 4.28)、「オリエンテーションの方法は良かった」(4.46 → 4.30)、「(種目内での) 班分けの方法は良かった」(4.46 → 4.45)、「この授業から啓発されることが多かった」(4.46 → 4.32) となっている。特に「授業は創造性に富む内容だった」において、前回より大きく下がる結果となったが、これも前述の応用技術の獲得と同様の理由が大きいと考えられる。しかしながら、すべての項目において前回より低くなっているものの、全体的には比較的高評価であることがうかがえる。これらの項目が高かったことは、前回と同様ではあるが、教員の指導方法への満足度は高く、またコミュニケーション能力が高く問われる昨今¹⁰⁾、受

表6 授業の方法についての結果 (種目別)

項 目	全体	スキー	ボード
1. オリエンテーションの方法は良かった	4.30	4.30	4.30
2. 事前授業の方法・内容は良かった	4.15	4.10	4.19
3. (種目内での) 班分けの方法は良かった	4.45	4.55	4.37
4. 練習形態は良かった	4.62	4.80	4.48
5. 練習の進行状況は適切であった	4.57	4.80	4.41
6. コミュニケーションは良かった (対教員)	4.72	4.75	4.70
7. コミュニケーションは良かった (対学生)	4.53	4.65	4.44
8. 授業は創造性に富む内容だった	4.32	4.40	4.26
9. この授業から啓発されることが多かった	4.32	4.40	4.26
10. この授業は自分が期待していた通りであった	4.34	4.70	4.11
11. 指導教員は授業をよく工夫していた	4.64	4.75	4.19
12. 指導教員は十分に熱意を持って指導を行っていた	4.72	4.70	4.74
13. 実習の時間配分は適切だった	4.51	4.65	4.41
14. 理解を深めるための補助手段 (VTR・プリント) は適切だった	4.28	4.30	4.26
15. 教員の話し方は、良かった	4.70	4.65	4.74

講生にとってはその能力を鍛える場としても有意義であったといえるであろう。

また、先にも触れたが、事前授業や講義での内容については、今後も引き続き検討課題として改善を図っていかなければならない。

3. 施設等について

表7及び表8は、「施設等について」に関する結果である。全体5項目での平均値は、前回の4.57から4.20へと大幅に下がっている。

「ゲレンデは良かった」は4.78から4.36、「場所(往復も含めて)は良かった」では4.76から4.51であった。前回、全体の結果の中では低く改善を要すると考えられた項目では、「レンタル用具(質・料金)は良かった」は3.97から3.62、「食事は良かった」では4.27から4.17という結果であった。

このうち、「ゲレンデは良かった」において、種目別・レベル別に細かく分類してみると、スキー上級者の評価が突出して3.29とかなり低い値を示して

表7 施設等について

項目	平均値	標準偏差	V5	V4	V3	V2	V1	前回値	誤差
1. 場所（往復も含めて）は良かった	4.51	0.78	63.8	27.7	4.3	4.3	0.0	4.76	-0.25
2. ゲレンデは良かった	4.36	0.90	57.4	25.5	14.9	0.0	2.1	4.78	-0.42
3. 宿泊施設（ホテル全般・部屋）は良かった	4.36	0.70	48.9	38.3	12.8	0.0	0.0	4.56	-0.20
4. 食事は良かった	4.17	0.82	40.4	38.3	19.1	2.1	0.0	4.27	-0.10
5. レンタル用具（質・料金）は良かった	3.62	1.48	42.6	14.9	19.1	8.5	14.9	3.97	-0.35

V5:「全くそう思う」と回答した割合(%) V4:「そう思う」と回答した割合(%) V3:「どちらとも言えない」と回答した割合
 V2:「そう思わない」と回答した割合(%) V1:「全くそう思わない」と回答した割合(%)

表8 施設等について（種目別）

項目	全体	スキー	ボード
1. 場所（往復も含めて）は良かった	4.51	4.30	4.67
2. ゲレンデは良かった	4.36	4.10	4.56
3. 宿泊施設（ホテル全般・部屋）は良かった	4.36	4.45	4.30
4. 食事は良かった	4.17	4.25	4.11
5. レンタル用具（質・料金）は良かった	3.62	4.45	3.00

いたことがわかった。また、「レンタル用具（質・料金）は良かった」では、スキーが4.45であるのに対して、スノーボードは3.00とかなり低い数値となっている。

ゲレンデ規模やコース設定という点において、スキー上級者が上越国際スキー場では満足できていないことは否めない。費用や立地といった兼ね合いもあるが、より良い実習地の模索が必要であると感じられた。また、レンタル用具に関しては、実際スノーボードにおいてビンディングの破損等が多く、質の面で問題があったことがその要因と考えられる。こちらも今後検討が必要であろう。

4. 総合評価

表9及び表10の「総合評価」においても、平均値は4.88から4.79へと前回より若干低い値を示した。「非常に良かった」が87.8%から78.7%、「まあまあ良かった」が12.2%から21.3%となっている。前回と同様、「普通」、「少し悪

表9 総合評価

項目	平均値	標準偏差	V5	V4	V3	V2	V1	前回値	誤差
この授業の総合評価は	4.79	0.41	78.7	21.3	0.0	0.0	0.0	4.88	-0.09

V5:「非常に良かった」と回答した割合(%) V4:「まあまあ良かった」と回答した割合(%) V3:「普通」と回答した割合
V2:「少し悪かった」と回答した割合(%) V1:「悪かった」と回答した割合(%)

表10 総合評価(種目別)

項目	全体	スキー	ボード
この授業の総合評価は	4.79	4.75	4.81

かった」、「悪かった」と回答した受講生が一人もいなかったという点では、この授業に対する満足度は高いと考えられる。

IV. まとめ

本研究は、生涯スポーツ演習Ⅱ(スキー・スノーボード)で実施している「学生による授業アンケート」の結果を、前回と比較検討することで、今後の授業内容の質的向上を図る資料を得ることを目的とした。その結果、以下のことが明らかになった。

1. この授業への総合評価は、「非常に良かった」が87.8%(前回)から78.7%(今回)、「まあまあ良かった」が12.2%から21.3%と、前回よりも「非常に良かった」という回答が低かった。しかしながら、それ以外の回答である「普通」、「少し悪かった」、「悪かった」が0%と受講生全員が肯定的な評価を示し、前回と同様にこの授業への満足度は高かったことが窺える。
2. 実技指導に関しては、スノーボードの応用技術の習得に対して、学生のニーズの把握とともに、教員が指導方法のさらなる研鑽を図る必要がある。
3. オリエンテーションの方法、事前授業、講義の内容については、昨年に引き続き改善の余地があり、今後は特に実技講習以外の充実も図っていく必要がある。

4. ゲレンデ、レンタル用具に関しては問題が存在するので、ハード面での改善も検討する必要がある。
5. 質問項目によっては、スキー受講者とスノーボード受講者では評価に開きがあることがわかった。

V. 今後の課題

これまで学生による授業評価ということで、授業後の満足度を中心に把握することを努めてきた。しかしながら、学生がこの授業に求めていることが多様化してきていることが窺える中で、より良い授業にしておくために受講動機の把握など授業前の調査も検討していく必要があるとともに、現在実施している質問項目の精査なども必要であろう。

参考文献

- 1) 大学生の健康・スポーツ科学研究会（2010）、「大学生の健康・スポーツ科学 三訂版」pp.93-94.
- 2) 麓信義（1997）、「学生による授業評価から大学における教養教育授業のあり方を考える―主として保健体育分野の授業について―」、弘前大学教育学部紀要、第78号、pp.73-92.
- 3) 井村仁、真田久、佐野淳、西保岳、長谷川悦示、鍋倉賢治、内山治樹、澤江幸則（2008）、「平成19年度体育専門学群における授業評価結果」、筑波大学体育科学系紀要、第31巻、pp.211-216.
- 4) 塙佐敏、高橋一栄（2008）、「生涯スポーツを志向した大学体育におけるスポーツの役割と意義」、新潟医療福祉学会誌、第8巻第2号、pp.52-57.
- 5) 綿祐二、舛本直文（1993）、「体育実技Bコース：スキー」における学生による授業評価、東京都立大学体育学研究、第18号、pp.53-59.
- 6) 本間崇、千足耕一、布目靖則、南隆尚（1995）、「正課体育スキー実習における学生による授業評価」、大学体育研究、第17号、pp.37-48.

生涯スポーツ演習Ⅱにおける学生による授業評価について (2)

- 7) 曾田宏、中西匠、野老稔、二宮恒夫 (1997)、スキー実習における授業評価の構造、武庫川女子大学紀要、人文・社会科学編、第45巻、pp.49-55.
- 8) 山口立雄 (2008)、大学一般教育体育実技のスノーボード授業に対する受講学生の意識、岡山大学教育実践総合センター紀要、第8巻、pp.109-115.
- 9) 山口良博、岩本哲也、下谷内勝利、末次美樹、鈴木淳平、柳浩二郎 (2013)、生涯スポーツ演習Ⅱにおける学生による授業評価について、駒澤大学総合教育研究部紀要、第7号、pp.675-683
- 10) 日本経済団体連合会 (2011)、産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート結果.